

学外活動応援奨学金 イギリス訪問について

中央大学文学部人文社会学科西洋史学専攻 4 年

21E2326018D 桑原萌奈

はじめに



上段：ホテル周辺。

下段左：ホテル近くの公園。

下段中央：公園にあった、広島
島の原爆を慰霊する桜。

下段右：同じく、公園のリス。
日本で言うハトのような身近
な存在のようだった。



私は 2024 年 10 月 25 日～11 月 2 日の約 1 週間、文学部学外活動応援奨学金を利用し、イギリスを訪問した。活動内容は『トマス・ベケットのイメージと史料調査』。ベケットとは、12 世紀イングランドにおけるカンタベリ大司教だ。強権を握っていた王と対立し、暗殺された後、聖人として人気を博してしまった人物である。本調査は、彼が教会や博物館でどのように扱われているか調べ、当時執筆されたベケット伝の写本を実際に読んでみるという企画だった。

私はベケットが聖人として崇敬された過程の研究が好きだ。卒業論文のテーマにするほど好きだ。しかし、日本ではほとんど史料がない。ベケット以前に、古い教会や中世ヨーロッ

パの展示、中世写本そのものを目にする機会が少ない。例えば「カンタベリ大聖堂はベケットの聖地となり、多くの巡礼が訪れた」と書籍に書かれていても、TV番組や観光客向けの動画を基にイメージするしかない。現地の人々がベケットをどう思っているかもよく分からない。「宗教改革により英国国教会が成立すると、ベケット崇敬は弾圧されて云々」と言われると、更にわけがわからなくなる。おそらく、外国の歴史が好きな方は似たような経験をされているのではないか。

よって今回の訪問では、イギリスにおけるベケットのイメージを調べるため、以下の施設を訪問した。

- ・カンタベリ大聖堂（ベケットの聖地、現在は英国国教会）
- ・ウェストミンスター寺院（英国国教会の総本山）
- ・ウェストミンスター大聖堂（イギリスのカトリックの総本山）
- ・V & A博物館（国立博物館）
- ・大英博物館（国立博物館）

さらに、ベケット伝の一次史料を閲覧するため、以下の図書館を訪問した。

- ・Lambeth Palace Library（英国国教会による図書館）
- ・大英図書館（国立図書館）

円安が報道される今、本奨学金がなければ、飛行機や宿の心配をせずに調査を行うことは不可能だった。本当にありがたい。

しかし、訪問にあたって、懸念も多々あった。

- ・英語は喋れるのか（喋れない）
- ・食事は合うのか（イギリス料理には不穏な噂もある）
- ・本当にイメージ調査はできるのか（教会でも博物館でもベケットは不人気かもしれない）
- ・帰ってこられるのか

結論から言うと、英語は喋れなかった。

聞き取ることもできなかった。

“She can't speak English!” だけ、言われすぎて鮮明に覚えている。無念である。

しかし各所の職員の方々は優しく、苦笑いしながら翻訳アプリを差し出してくれた。Google 翻訳があれば海外に行って帰ってくることはできる。次回はより語学力を磨きたいが、おかげさまで、無事に調査を終えて帰国することができた。調査結果に関しては、ぜひ報告書を見ていただきたい。

では、他の懸念は的中してしまったのか。本稿では、調査の具体的な過程について報告したい。

1. 食事は合うのか

以下の写真が、実食したイギリス料理の実例である。



左：エッグベネディクト。イングリッシュマフィンの上に、カリカリのベーコン、半熟卵、濃厚なマヨネーズを盛り付けている。



左：イギリス風朝食。オムレツ、フライドポテト、野菜サラダのセット。



左：フィッシュ&チップス。ハンバーガー2個分ほどのサイズ。飲み物はシードル（リンゴを発酵させた酒）。



左：ポリッジ（オール麦を牛乳で煮込んだ粥）にカボチャの種とブルーベリージャムを散らしたもの。ヨーロッパの昔話によく出てくるので注文したが、これだけは正直に言って微妙な味だった。



上：カンタベリのパブ。16～17世紀の建物という。
下：パブの軽食。 *Open Sandwich* と書かれたものを注文したら、想像より巨大なものが来た。

写真の通り、少なくとも私が食べたものは、素晴らしく美味しかった。
また、今回は入れなかったものの、ユニークな店も多かった。



左：不思議な日本食店。焼きそばやボキ丼
が混ざっているのが楽しい。



左：カンタベリ大聖堂の近くに守護聖人ト
マス・ベケットの名前を関したパブがある
と知り、訪問。ハロウィンの前日だったため
か、予想外な概観だった。

なお、個人的に最も好きだったのは、次の料理だった。



左：本場のレパノン料理。英語のメニューが
読めなかったため、*Baba Ghannouj*という
料理名しか分からない状態で注文した。巨
大な薄焼きのパンと、酸味とオリーブオイ
ルが効いたディップがよく合う。

2. 本当に調査できるのか 教会編

調査報告書を見ていただくと分かるように、教会における調査そのものは無事に終えることができた。建築や美術も美しい。一方で一筋縄ではいかないものを目にすることもあり、楽しい見学となった。

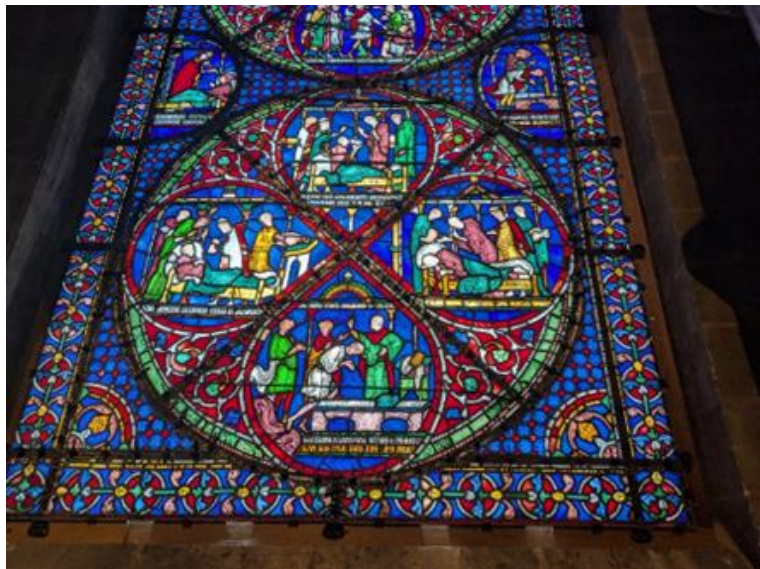
2-1. カンタベリ大聖堂



上：カンタベリ大聖堂。

下左：美しいステンドグラス。聖人となったベケットによる奇跡が描かれている。

下右：ステンドグラスに描かれた奇跡。二日酔いに苦しむ巡礼を幻となったベケットが救っている。世俗的なニーズにも対応してくれるようだ。



2-2. ウェストミンスター寺院



左：ウェストミンスター大聖堂。この祭壇前で国王が戴冠される。



左：ウェストミンスター寺院内に所せましとひしめいている記念碑。全て墓所や棺である。



左：エリザベス 1 世の墓所。実は、政敵だったスコットランド女王メアリ・スチュアートの墓所の方が豪華な造りになっている。配布された音声ガイドによると、両者の埋葬を行ったのはメアリーの息子であるイングランド王ジェームズ 1 世だった。勝者史観をも考えさせる、恐るべき観光地だった。



上：ウエストミンスター寺院の東側にはビッグ・ベンや広場がある。

下左：広場に設けられたイギリスの大政治家の像の1つ、ウィンストン・チャーチル。

下右：同じく大政治家の像の1つ、マハトマ・ガンディー。周囲にはネルソン・マンデラの像も。彼らとイギリスの関係を考えると、特に謝罪の文言もなく像を置くのも黙殺するのもどうかと思ってしまう。

3. 本当に調査できるのか 博物館編

こちらでも調査報告書を見ていただくと分かるように、博物館でもベケットに関する史料は充実していた。ところが、博物館の展示が充実しすぎていたため、予定していた日数では回り切れない事態が発生。さらに、調査と関係のない展示まで魅力的で、なかなか出ることができなかった。

3-1. 大英博物館



右：大英博物館。広大すぎてなかなか目指す展示室に行きつけなかった。



上下：大英図書館の展示品。どのギャラリーを見ても、高校世界史の教科書や映画で見たことがある遺物が置いてある。明らかにイギリス以外の地域の展示物も網羅しているが、所有権は大丈夫なのだろうか。



右：いまだに「あれは何だったんだろう…」と思いつく展示物もある。

3-2. V&A 博物館



右：V&A 博物館のルネサンス期の広場を模したギャラリー。他にも、中世の貴族の館を模したギャラリー、ロココ調のサロンを模したギャラリー、ヴィクトリア期の屋敷の一室を模したギャラリー等があり、映画セットを見学する感覚で展示を見ることができた。



右：V&A 博物館の日本ギャラリー。大英博物館にも同様の展示があった。英語の展示を改めて読んでみるのも楽しい。



右：トイレのタイルをよく見ると、展示品としての説明書きが（！）

3-3. 大英図書館

一方でベケットに関する史料があるかと思いきや、不発に終わった博物館もあった。中世史の史料が集結していると聞き、大英図書館の特別展 *Medieval Woman* に参加したものの、ベケット崇敬に関するものは一切見つけられなかった。本展のコンセプトは「中世を生きた女性たち自身の人生を伝える史料」である。残念ながら現状では、ベケット崇敬に関わった女性の史料は少ないのだろう。

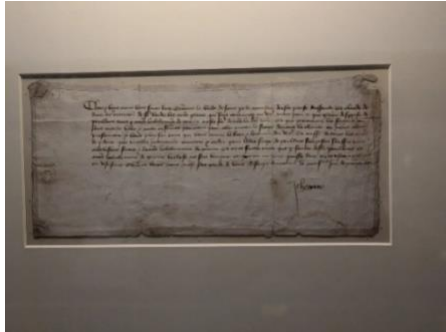
しかし展示は充実しており、医療・家庭生活・経済活動・政治・宗教等のテーマから、幅広い時期・地域・身分の女性の活動を紹介していた。クリスティーヌ・ピサン、マーガレット・オブ・アンジュー、ヒルデガルド・フォン・ビンゲンら、授業や書籍に登場する女性の貴重な資料を一気に見ることができた。知らなかった人物の紹介があったことも嬉しい。さらに展示にも工夫が凝らされており、数値の紹介・音声・匂いも利用して中世の生活を伝えていた。日本ではなかなか見られないテーマと規模の展示だった。



左：大英図書館。後述する中世写本の閲覧でもお世話になった。右：観覧した特別展。



左：カトリーヌ・ド・ピサンの写本『女の都市』。
左：薔薇戦争の指導者の1人、イングランド王妃マーガレット・オブ・アンジューのペットの（可能性がある）頭蓋骨。



左：ジャンヌ・ダルク
の署名

右：個人的に最も感動した展示。中世の女性聖人が見た「天使」と「悪魔」の幻を、スクリーン・音・音・音で再現している！

大英図書館は無料で入場できる常設展も充実しており、マグナ・カルタからビートルズの手書きの楽譜まで、幅広い時代・地域の史料を見ることができた。

なお今回の調査では、本館とともに Lambeth Palace Library を訪問している。中世写本を閲覧するためだ。中世の写本といえば、魔法学校の図書室か修道院の隠し書庫か、一番身近な場所でも美術館に保管されているイメージしかない。果たして下手な英語のメールを送っただけで、閲覧させてもらえたのか。気になる方は、ぜひ報告書にも目を通していただきたい。

おわりに

このように、懸念はところどころ的中しつつ、充実した調査を行うことができた。私はイギリス中世史を主軸に各施設を回ったものの、近世や近代の史料も充実していた。他の時代を専門としている方も、機会があればぜひ訪問してほしい。さらに、行けなかった場所でも気になるものが多々ある。『シャーロック・ホームズの下宿』『チャールズ・ディケンズが愛したパブ』『ジキル博士のモデルとなった研究者による博物館』等、観光したかった場所も多い。語学力を磨いた上で、また訪れたい。



左：紅茶専門店のデパート。左：ショーケース。



左：書店のショーケース。



左：St Pancras 駅。隣は児童書『ハリー・ポッター』の舞台となったキングス・クロス駅なので、ファンの姿をよく見かけた。